様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２７ 日現在

機関番号：３２６１８
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ２１９９２

研究課題名（和文）キャリル・チャーチル後期作品とユーゴスラヴィア空爆反対運動との連関

研究課題名（英文）Caryl Churchill's Later Works and Anti-War Activities against the Nato Bombing of Yugoslavia

研究代表者
金田　迪子（KANEDA, Michiko）

実践女子大学・文学部・助教

研究者番号：３０８７６９４１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、現代イギリスの劇作家とユーゴスラヴィア空爆反対運動との連関を調査した上で、Far Away（2000）を中心とするCaryl Churchill（1938-）の後期作品のグローバルな文脈における位置づけを検証した。本研究を通して、チャーチルの後期作品の内に、ユーゴスラヴィア空爆反対運動をめぐる言説や表象における、アメリカの単独主義的な軍事介入、ブレア政権下のイギリスの追従、倫理的な戦争というレトリック等、グローバル化以降のイギリス社会をめぐる問題群との関連を持つ要素が含まれていることを確認し、チャーチルの作品と市民運動との言説・表象を通した関わりを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究を通して、チャーチルおよび同時代のイギリスの劇作家の作品と作家の市民運動への参加の実態を調査することで、現代イギリス演劇の展開において、ポスト冷戦期における政治的変動とそれに呼応する市民運動を、作品分析における参照項として扱う研究の可能性を検討することができた。また、冷戦終結以降のグローバルな社会を象徴するユーゴスラヴィア紛争に対して、同時代のイギリスにおける文学・文化がどのような形で応答を行なっていたかについて、特にユーゴスラヴィア空爆反対運動という実践に関心を限定し、詳細を明らかにすることで、現代イギリス文学・文化研究に新たな着目点を投じ、分野の射程の拡大の一環に貢献した。

研究成果の概要（英文）：This study explores Caryl Churchill's later works in relation to the anti-war activities against the NATO bombing of Yugoslavia. Churchill significantly displays her new focus on the global conflicts around the beginning of the 1990s. This includes the NATO bombing of Yugoslavia, against which Churchill and her colleague playwrights protested by participating in anti-war activities. This study focused on how the bombing by NATO and its arguments are related to the works through research on newspaper articles, contemporary newsreels, and documentaries around the bombing, and on the participation in the protests by British playwrights Horold Pinter, Howard Brenton, and Tariq Ali. The study finally concludes that in Churchill's later works, there are concerns about the discourses and representations seen in the discussion on the bombing of Yugoslavia, such as circulated images of refugees and the justification of violence, comparably indirectly to the other playwrights.

研究分野：英文学

キーワード：英米文学　現代演劇　イギリス演劇　キャリル・チャーチル　ハロルド・ピンター　ハワード・ブレントン　ユーゴスラヴィア空爆　ポスト冷戦期

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

（１）チャーチル後期作品におけるグローバル化への関心

キャリル・チャーチル（Caryl Churchill, 1938-）は現代イギリスを代表する劇作家として地位を確立させているが、その評価は *Cloud Nine*（1979）、*Top Girls*（1982）等の 1980 年代までの代表作に集中し、主にイギリス国内の設定を通して、社会主義とフェミニズムという 2 つの理論的枠組を通して社会の抑圧的な構造を顕現させた作品が評価の中心をなしている（Aston and Diamond 2009）。一方で、チャーチルの *Mad Forest*（1990）、*Drunk Enough to Say I Love You?*（2006）、*Seven Jewish Children*（2009）等の 1990 年代以降の作品群では、東欧革命、イラク戦争、イスラエル・パレスチナ問題といった、複数の国や地域にまたがる事象に関心が推移し、紛争を含むグローバル化により複雑化・多様化した社会の諸問題に目が向けられていることが注目されている（Boil 2013; Soncini 2016; Stevens 2016）。このことからチャーチルの関心は特に冷戦終結以降にグローバル化へ推移したと言えるが、この後期作品に着目して、チャーチルが同時代の演劇が対峙するべき問題群を的確に捉え、自身の作品に取り込んできた経緯を評価する研究は十分であるとは言えない。そのため本研究では、この 1990 年代以降のチャーチルの作品群が、グローバル化という現象のどのような点を前景化し、どのように分節化しているのかを追究することを課題とした。

（２）イギリス人劇作家とユーゴスラヴィア空爆反対運動との関係

特に冷戦終結以降にグローバル化した世界を象徴する歴史的な出来事として、ユーゴスラヴィア紛争がある。1999 年 3 月から 6 月にかけて、ユーゴスラヴィアのコソヴォ自治州におけるアルバニア系住民の迫害が加速する中で、国連による和平交渉に応じないミロシェヴィッチ政権に対し、NATO 軍は国連の承認を待たず空爆を開始した。トニー・ブレア首相を含む西側諸国の首脳の一部は軍事介入を支持したが、国連憲章への違反、民間人への誤爆、民間施設への攻撃対象の拡大、地上兵力の投入を行わない空爆に依存する作戦の遂行などをめぐり、その正当性について多くの疑問も提示された。この紛争をめぐっては、冷戦期以降の旧共産圏の国々におけるナショナリズムの台頭や、人道的行為を理由とする NATO による軍事介入および西側諸国によるその正当化の問題など、グローバル化以降の社会を特徴づける様々な問題が喚起された。特に 1990 年代末の NATO によるユーゴスラヴィア空爆に対しては、西側諸国の各都市において反対運動が起こり、チャーチルを含むイギリス人劇作家たちは積極的にこの運動への参加を表明した。この運動への参加と作家との関わりに着目した研究は少ないが、冷戦終結以降のイギリスの現代演劇の展開における参照項の一つとして考えられる。

２．研究の目的

（１）チャーチル後期作品とユーゴスラヴィア空爆との関係

チャーチルを含む現代イギリスの左派的な関心を持つ劇作家は、1990 年代後半から 2000 年代にかけて、直接・間接にユーゴスラヴィア空爆反対運動への関わりを表明していた。ユーゴスラヴィア空爆反対運動は、イギリス・アメリカ・ヨーロッパの三地域が相互に関わりあう他、冷戦終結以降の国際秩序の維持をめぐる問いを孕んでおり、グローバル化に伴う問題を検討する際の重要な参照項となりうる。そこで本研究では、チャーチルの後期作品をユーゴスラヴィア空爆との関係から検討することを通して、チャーチルの作品におけるグローバル化の表象がどのようなものであるかを確認することを第一の目的とした。

（２）チャーチルの抗議活動への参加と作品の関係

チャーチルは 1960 年代の中絶合法化活動への参加、2000 年代のガザ地区支援のチャリティ公演、2010 年代の反トランプキャンペーンへの作品提供等、定期的に抗議活動への参加を表明してきたが、チャーチルによる抗議活動への参加と作品の関係に着目した先行研究は多くない。そこで本研究では、チャーチルがロンドン市内で参加した空爆反対運動の実態を明らかにするとともに、運動の場で語られた言説や生み出されたイメージ等と作品がどのような関係を持っているかを明らかにすることを第二の目的とした。

３．研究の方法

（１）現代イギリスの劇作家とユーゴスラヴィア空爆反対運動との関係

先に述べたように、現在明らかにされているチャーチルと空爆反対運動との関わりは限定的である。そのため本研究では、チャーチル以外のイギリス人劇作家の活動や発言にも射程を広げて調査を行うことを通して、チャーチルの後期作品が執筆された同時代の文脈をより詳細に明らかにすることを試みた。このことから、本研究では現代イギリスの劇作家とユーゴスラヴィア空爆反対運動との関係や、ロンドンにおける空爆反対運動の実態を、資料文献と海外調査を通して検討し、同運動に特徴的な表象・言説を検討した。本研究では、(1) *Guardian* 紙を中心に寄稿されたイギリス人劇作家による空爆反対の支持の表明を行う署名記事、(2) 空爆反対運動を通して出版されたパンフレットへの寄稿、(3) 空爆反対運動の集会における劇作家のスピーチ文、(4)

Marxism Today, New Socialist, New Society, Socialist Review 誌等の専門誌への寄稿記事、(5) 同時代のデモやパレード等に関する資料、(6) 同時代の新聞・テレビ・ラジオ番組等の一次資料、およびそれらの資料の分析に用いる（7）同時代の空爆反対運動に関連する言説等の二次資料の調査を行った。

（２）作品に見られるユーゴスラヴィア空爆反対運動に関する言説・表象
上記の調査の結果を踏まえて、チャーチルの後期作品の検討を行った。ユーゴスラヴィア空爆をめぐる言説や表象と、チャーチルの後期作品との間に見られる連関の検討を行った。
また、チャーチルの後期作品の中には、上演前後にチャーチルがユーゴスラヴィア空爆反対の投書に参加していた *Far Away*（2000）を除き、空爆反対運動との直接的な関連性が明らかになっている作品はない。そのため本研究では比較対象として、空爆反対運動との関わりが明確な劇作家および作品についても調査と検討を行った。具体的にはハロルド・ピンター（Harold Pinter, 1930-2008）とその詩集 *War*（2003）、ハワード・ブレントン（Howard Brenton, 1942-）とタリク・アリ（Tariq Ali, 1943-）とその共著 *Collateral Damage*（1999）の検討を行った。

４．研究成果
（１）Committee for Peace in the Balkans アーカイヴ資料の調査
2022 年度に実施した海外調査では、Modern Record Centre, University of Warwick に所蔵されている、当時ロンドン市内におけるユーゴスラヴィア空爆反対運動を主導していた団体 Committee for Peace in the Balkans（1997-1999）のアーカイヴ資料の調査を行った。Committee for Peace in the Balkans は Labour CND 内の下部組織であり、労働党議員アリス・マホン（Alice Mahon）の主導の下に行われたブレア首相に対するダウニング街における抗議運動や首相への請願書、ロンドン市内で開催されたデモのポスターやリーフレット等が収蔵されていた。
本調査ではこれらの資料の内に、劇作家のハロルド・ピンター、タリク・アリらが参加したデモや集会のチラシを確認することができた。これらの資料により、まず 1990 年代から 2000 年代にかけてロンドン市内で展開されたユーゴスラヴィア空爆反対運動は、1960 年代を中心にその活動を展開させた CND（Campaign for Nuclear Disarmament）による反戦運動との連続性を持っていたことや、同時代の左派的な関心を持つ劇作家が実際に関わっていたデモや集会の詳細といった、ユーゴスラヴィア空爆反対運動の実態の一部を明らかにすることができた。

（２）British Library 収蔵の映像資料の調査
同海外調査ではまた、British Library にて調査を行い、劇作家のハロルド・ピンターがナレーションを務めた Channel 4 制作のテレビ番組 *Against The War*（1999）を視聴することができた。本番組は Channel4 のニュース報道に使用された報道映像の再構成を行いつつ、ピンターがナレーション役として登場し、ピンターと監督スチュアート・アーバン（Stuart Urban, 1958-）の共著となる脚本を読み上げる役割を果たしていた。本資料についてはナレーションの書き起こしを行い、ピンターのユーゴスラヴィア空爆に対する批判的なコメントを収集することができた。

（３）British Film Institute 収蔵の映像資料の調査
さらに同海外調査では、British Film Institute にて調査を行い、当時放映された BBC, Channel4, ITV 等のイギリス国内のテレビ局において製作された、ユーゴスラヴィア空爆に関連するテレビ番組の映像を確認することができた。これらの資料を通して、ユーゴスラヴィア空爆に関する報道番組において流通していた特徴的なイメージや映像等の詳細を確認することができた。さらに調査では、ITV 制作のユーゴスラヴィア空爆の是非を巡る討論番組 *Nato on Trial*（1999）の映像を確認することができた。本番組は NATO によるユーゴスラヴィア空爆の功罪を問う擬似裁判という舞台設定のもとで、空爆の支持者・反対者に分かれて番組出演者が討論を行い、それを受けてフロアの参加者が意見を交わした後、最後に番組内で投票を行うという構成となっていた。これらのテレビ番組の存在から、同時代にロンドン市内で上演されたユーゴスラヴィア空爆を扱う演劇作品の想定される観客層にとって、ユーゴスラヴィア空爆を想起させるイメージや、空爆に関する背景知識や議論の要旨などが、メディアを通して普及していたことを確認することができた。

（４）ハロルド・ピンターによる空爆反対運動と作品との比較
上記の海外調査の結果を踏まえて、チャーチルの周辺作家の一人である、ハロルド・ピンターの発言と作品との関係の検討を行った。他のイギリスの劇作家が共同署名という形で *Guardian* 紙にユーゴスラヴィア空爆反対の意見を表明している中、ピンターは同紙に単著での署名記事の掲載があるほか、コメンテーターとしても記事を寄稿している。またユーゴスラヴィア空爆論集へのエッセイの寄稿や、Committee for the Peace in the Balkans 主催のデモ集会での演説、ドキュメンタリー番組への出演等も知られており、ユーゴスラヴィア空爆運動との明確な関わりを持っている。本研究ではこれらの新聞記事・エッセイ・ドキュメンタリー番組等におけるピンターの発言と、ユーゴスラヴィア空爆と前後して発表されたピンターの反戦詩集 *War*（2003）

に収録された作品との比較を行った。
ピンターの反戦詩集 *War* は 2001 年の世界貿易センター同時多発テロ及びイラク戦争の勃発という文脈で 2003 年に出版されたが、本集収録の詩にはピンターの反ユーゴスラヴィア空爆論に特徴的な、アメリカ政府の軍事行動と声明との矛盾や、そこから導かれる言語の虚構性の関係に対する関心が表現されている。ピンターは自身のユーゴスラヴィア空爆批判を行う生命の中で、アメリカ政府の言語とアメリカ政府の行動の間に生じる“discrepancy”（“Foreword” viii）を非難し、第二次世界大戦後以降のアメリカ政府に対する“exercised a sustained, systematic and clinical manipulation of power”（viii）と呼びつつ、そこにおいて“masquerading a force for universal good”（viii）が行われてきたと糾弾したが、本研究では、ピンターの反戦詩からそれらの主張をなぞるようなアメリカとイギリスが行う言葉の濫用（abuse）に対する分析的な視点が認めることを確認した。詩“Democracy”では、民主主義という語を冠した表題と卑俗な単語が羅列される本文とが対比され、詩“God Bless America”でも、第一節でアメリカ人達が“armoured parade”に参加し“ballads of joy”と共に世界へと“gallop”する情景を展開しつつ、第二節以降は一転して“gutters are clogged with the dead”と戦場の風景を提示し、第三節では“Your head rolls onto the sand,” “Your head is a pool in the dirt,” “Your head is a stain in the dust”と暴力の客体になることを読み手に強制する。これらの例にはいずれも、政府の操る言語と実際の軍事行動の「不一致」への関心が見られた。喜志哲雄は 2000 年以降のピンターが政治の言語を自らの言葉に対する強い関心に基づき分析したことを指摘するが、ユーゴスラヴィア空爆をめぐるピンターの発言もまた「言語的頽廃」（220）に対するピンターの関心を表していることを確認することができた。

（5）ハワード・ブレントンによる空爆反対運動と作品との比較
劇作家のハワード・ブレントンと、雑誌 *New Left Review* の編集者や活動家として知られるタリク・アリは、1990 年代から *Iranian Nights*（1989）、*Moscow Gold*（1999）等の共作を発表してきたが、ユーゴスラヴィア紛争への介入をはじめとするブレア政権の政策批判を行うため、演出家のアンディ・ド・ラ・トゥール（Andy De La Tour, 1948-）と演劇団体 Stigma を結成している（Reinelt 2007）。Stigma は 1998 年から 2000 年にかけての活動期間の間、ブレア政権を題材とした 3 つの風刺劇 *Ugly Rumours*（1998）、*Collateral Damage*（1999）, *Snogging Ken*（2000）を発表した。本研究ではユーゴスラヴィア空爆をめぐる論争を直接的に扱った *Collateral Damage*（1999）に注目し検討を行った。
Collateral Damage はロンドンに暮らすリベラルな中年夫婦の Daniel と Leonie の会話が、ニュース報道をきっかけにユーゴスラヴィア空爆の是非を巡って論戦を繰り広げた末に、Leonie の過去の交際相手への Daniel の嫉妬などが露呈し、夫婦関係の決裂が訪れるという筋書きの短編劇である。同時代の反空爆論の論点を忠実に演劇化している。本作に特徴的であるのは、夫婦の論争がリベラルな左派の間での意見の対立を体現している点であり、この夫婦間の意見の相違はタリク・アリが注目している左派の内部での意見の差異と共通している。アリはエッセイにおいて、人道的行為を理由に NATO による空爆を肯定するリベラル派を“keen warmongers”（353）と糾弾し、メディアによる報道への感情的な反応から軍事行動が必須であるとするリベラル派の訴えを“The Europe that is backing the American war in Serbia is the liberal, social-democratic half of the continent”（353）と非難している。アリの見解は支持派の Daniel と反対派の Leonie の造形に反映されており、Leonie が、当時反対派の主要な論拠の一つとしてしばしば用いられたベオグラードのテレビ局への空爆や中国大使館への誤爆のような当時反対派の主要な論拠の一つとして用いられた軍事行動による犠牲の拡大の問題を指摘するのに対し、Daniel が“ democracy”（16） “human rights”（17）“just war”（17）等の空爆支持の言説のキーワードを用いて空爆を擁護する様子に見てとることができる。またブレントンによる Daniel の主張には、空爆反対運動を“anti-Americanism”（23）とみなしつつ冷戦構造に結びつけ、Leonie を“You still think you're in CND”（18）と反ヴェトナム戦争運動と同様の感覚で“[w]e hate war”（18）を唱えているだけだとする批判や、“Communism's dead, we've got to get out of the cold war mindset”（23）と、旧来の左派のイデオロギーの枠組みに基づく思考停止的な反論であるとする指摘のように、ユーゴスラヴィア空爆反対運動と、CND をはじめとする前世代の運動との連続性を示唆している点も見られた。

（6）キャリル・チャーチルの後期作品に見られるユーゴスラヴィアの表象
本研究では、チャーチルのユーゴスラヴィア空爆反対運動への参加と上演時期が重複している *Far Away*（2000）を、先ほどまで見てきたようなピンターやブレントンのより直接的に空爆反対運動との連関が認められる作品との比較を通して、本作に認められるユーゴスラヴィア空爆をめぐる言説・表象の検討を試みた。*Far Away* はそのプロットの高い抽象性から、環境破壊、全体主義、テロとの戦い等、様々なグローバルな脅威への警告として読まれてきた一方で、その上演時期がユーゴスラヴィア紛争と重複していることから、例えばボスニア紛争等のより同時代的な文脈における位置づけを検討する必要性も示唆されてきた（Luckhurst 2015）。
本研究では、同時代の新聞記事・報道映像等のメディアを通して流通したユーゴスラヴィア空爆をめぐる言説・表象と作品内の要素に共通する複数の点を確認した。一点目として、（1）「トラック」に乗った移民の表象を指摘した。*Far Away* の第一幕で少女 Joan が言及する、おばの

Harper の家の庭に停まっている「トラック（lorry）」（137）の中から人間の叫び声が聴こえてくるという光景は、同時代のコソヴォ空爆を特集する報道番組で頻繁に用いられた「トラックの荷台に乗る難民」の図像を髣髴とさせる。この図像は NATO による民間人の誤射の報道や、ユダヤ人強制収容所に関するトラウマ的な記憶とも結びつきつつ、空爆の象徴として賛成・反対の両方の文脈で用いられてきた。また二点目として、（２）「正義」をめぐる言説の存在に着目した。おじが“lorry”に乗っている人間たちを殴る場面を見たと言う Joan を “you're part of a big movement now to make things better”（142）と説き伏せ、“I'm on the side of the people who are putting things right”（142）という Harper の主張には、Brenton が Daniel を通して集約した空爆賛成派やトニー・ブレアの主張が重なる。スラヴォイ・ジジェク（Slavoj Žižek）は、コソヴォ空爆作戦において「人権（human rights）」や「人道的介入（humanitarian intervention）」といった語を用いた軍事行動の正当化が行われることにより、空爆に対する対抗的言説の形成が困難となる様を“moralistic depoliticization”（34）と危険視したが、ピンターがアメリカの言語の“discrepancy”という形で糾弾し、アリが“keen warmongers”への怒りとして表明したこのようなユーゴスラヴィア空爆支持派のレトリックに内在する正当化への警鐘は、*Far Away* においては Harper の自己正当化の形で現れていることを確認することができた。

以上のように、本研究では、ユーゴスラヴィア空爆反対運動の実態に関する調査を踏まえて、キャリル・チャーチルの後期作品 *Far Away*（2000）に見られる要素の内には、空爆をめぐる言説・表象に共通する要素が見出せることを確認することができた。このことから、チャーチルの後期作品においては、冷戦終結以降のグローバルな社会における暴力やその正当化の問題が扱われていることを確認した。また、チャーチルの周辺作家による空爆反対運動への参加と作品との関わりを調査することを通して、本作の上演当時のイギリスにおける演劇をめぐる状況の一端を明らかにすることができた。本研究の成果は、日本英文学会第 95 回全国大会における研究発表を通じて発表を行った。

〈参考文献〉

Ali, Tariq. “Nato's Balkan Crusade.” *Master of the Universe?: NATO's Balkan Crusade*. Edited by Tariq Ali. Verso, 2000. pp. 345-359.

---, ed. *Master of the Universe?: NATO's Balkan Crusade*. Verso, 2000.

Ali, Tariq, Howard Brenton and Andy De La Tour. *Collateral Damage*, Oberon Books, 1998.

Aston, Elaine and Elin Diamond. *The Cambridge Companion to Caryl Churchill*, Cambridge U P, 2009.

Barker, Howard et al. Letter to the Editor. *The Guardian* 10 April 1999. 21.

Boil, Julia. *The New War Plays: From Kane to Harris.* Palgrave Macmillan, 2013.

Cheng, Sinkwan, ed. *Law, Justice and Power: Between Reason and Will*. Stanford U P, 2004.

Churchill, Caryl. *Plays: Four,* Nick Hern Books, 2014.

Hammond, Philip and Edward S. Herman. *Degraded Capability: The Media and the Kosovo Crisis*. Pluto Press, 2000.

Luckhurst, Mary. *Caryl Churchill*. Routledge, 2015.

Pinter, Harold. Pinter, Harold. Letter to the Editor. *The Guardian* 8 April 1999. 21.

---. “Foreword.” *Degraded Capability: The Media and the Kosovo Crisis*, Edited by Philip Hammond and Edward S. Herman. Pluto Press, 2000. pp. vii-x.

---. *War*, Faber and Faber, 2003.

Reinelt, Janelle. “The ‘Rehabilitation’ of Howard Brenton.” *TDR*, vol. 51, no. 3, 2007, pp. 167–74.

Soncini, Sara. *Forms of Conflict: Contemporary Wars on the British Stage.* U of Exeter P, 2016.

Stevens, Lara. *Anti-War Theatre After Brecht: Dialectical Aesthetics in the Twenty-First Century.* Palgrave Macmillan, 2016.

Žižek, Slavoj. “NATO as God's Left Hand.” *Law, Justice and Power: Between Reason and Will*. Edited by Sinkwan Cheng. Stanford University Press, 2004. pp. 25-45.

喜志哲雄「編訳者あとがき」『何も起こりはしなかった—劇の言葉、政治の言葉』ハロルド・ピンター著、喜志哲雄編訳、集英社新書、2007 年、pp. 215-221。

ハロルド・ピンター『何も起こりはしなかった—劇の言葉、政治の言葉』喜志哲雄編訳、集英社新書、2007 年。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 金田迪子	４．巻 第95回（2023年度）
２．論文標題 イギリスのポリティカル・シアターとコソヴォ空爆反対運動―Howard Brenton, Harold Pinter, Caryl Churchillを例として	５．発行年 2023年
３．雑誌名 全国大会Proceedings（日本英文学会）	６．最初と最後の頁 ―
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 ―

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 金田迪子
２．発表標題 イギリスのポリティカル・シアターとコソヴォ空爆反対運動―Howard Brenton, Harold Pinter, Caryl Churchillを例として
３．学会等名 日本英文学会第95回大会
４．発表年 2023年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

―

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関